

「資料紹介」

図書資料部の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。その他の近着資料については『アジア経済資料月報』をご覧ください。

小田英郎： アフリカ現代政治 東京 東京大学
出版会 1898年 vii, 196+20p.

現代アフリカの政治に関して要領よくまとめられたこの本は、長年アフリカ政治研究に取り組んできた著者が大学での講義をもとに執筆したものであり、質の高い教科書となっている。

著者は、現代アフリカの最大の政治的課題を「ネイション・ビルディング」と捉えており、本書ではそのイデオロギー面、制度面、そして現実に生じている具体的諸問題、に関してそれぞれ数章を費やして論ずるという構成をとっている。

まず、イデオロギーに関しては、アフリカの政治的イデオロギーの特徴である「歴史的復権」について論じた後、独立を勝ち取るに際して重要な意義を持った「ナショナリズム」および「パンアフリカニズム」という二つの思想的潮流が説明される。そして独立以降のアフリカを特徴づける「アフリカの社会主義」に重点を置きつつ、具体例（タンザニア、ザイール）をまじえて論議されている。またパックス・アフリカーナの問題についても最終章で論じられている。

制度面として取り上げられるのは、政党および軍部である。アフリカで、一党制が圧倒的に多いこと、またしばしば軍部が政治に介入してきたこと、は歴史が示すとおりである。ネイション・ビルディングの過程でのこうした現実をどのように考えるべきか。実態面の説明とともに、理論的なアプローチも試みられている。

現代アフリカのネイション・ビルディング過程における具体的諸問題の事例としては、エチオピア革命、

アパルトヘイト問題、および国際紛争（チャド、オガデン、西サハラ、ウガンダ・タンザニア間）が取り上げられ、解説が加えられている。

近年のアフリカ研究においては、世界的に「政治」に関する関心が高まりつつあると言える（本誌前号所収の丹埜報告参照）。本書はその意味でもタイムリーであり、政治学研究者のみならず、アフリカ研究者に広く読まれるべき本であろう。

（武内進一）

A・アドゥ・ボアヘン編： ユネスコ・アフリカの歴史第7巻 —— 植民地支配下のアフリカ 1880年から1935年まで —— 日本語版（責任編集 宮本正興） 上下2巻 京都 同朋社 1988年 第1巻 40p.+pp.1~672p., 第2巻 3p.+pp.673~1292 (Ja-96-Un 1)

1970年に発足した「アフリカの歴史起草のためのユネスコ国際学術委員会」は、多面的なアプローチと広範な資料に基礎をおいた学際的な方法による『アフリカの歴史』全8巻、各巻平均800ページという壮大な書物の出版を1981年に開始した。

今回翻訳された第7巻（英語版、1985年刊）は、副題より明らかなように、アフリカにおいて植民地支配が開始され確立・強化された時期を対象とする30編の論文を収録している。本書の共通テーマは、植民地主義に対するアフリカ人の主体性と反応である。編者のボアヘンによる第1章と最終章ならびに、アフリカ分割の概論である第2章、アフリカと新世界の関係を扱った第29章を除く収録論文は、3部に区分される。第1部（第3章～第12章）は、1919年までを対象とする諸論文であり、植民地支配開始期のアフリカ人の主権

と独立を守る抵抗運動を主題としている。第2部(第13章～第21章)は、植民地支配によってアフリカが被った諸影響、単に政治・経済的な側面のみならず、社会、宗教、芸術を扱った論文も収録してある。第3部(第22章～第28章)は、植民地体制内での改善と「応化」を求める方策に転換した1919年以降の反植民地運動・民族運動を扱った諸論文である。各部は、一般的・大陸的視野からの総論に続いて、各地域別の論文という配列となっている。

上下揃定価2万円はやや高いとの印象も受けるが、アフリカ史専門家を総動員し、また日本のアフリカ学関係者が細心の訳出を図った労力を考えれば、この程度の支出は致し方あるまい。多数の図版も、原書に忠実に再録されている。

(池野 旬)

石郷岡建： さまざまのアフリカ 東京 三一書房 1989年 227p.

本書は新聞社のアフリカ特派員として最近まで5年近くジンバブエの首都ハラレに駐在した著者が、ほとんど未知であったアフリカについて日常の体験をもとにつづったレポートである。伝統的な結婚観や信仰、父系社会での女性の地位や生き方を紹介するI章「アフリカの地霊たち」、そしてII章「揺れる大地」、III章「独立のかなた」の3部に分かれている。

II章ではアフリカの伝統社会と西欧文化とのほぎまで苦悩する人々を具体例によって明らかにしようとする。なかでもアフリカの子供たちのうえに日本における海外帰国子女とおなじような問題がより深刻な形で起きているという話は興味深い。今、日本では海外から帰国した子供たちが日本での教育になじめなかったり、周囲からもスムーズに受け入れられなかったりすることが社会問題になっているが、アフリカでは教育が旧宗主国の言葉である英語などによって行なわれているために、教育内容と現実のアフリカ社会とのギャップに苦しむ子供が多くなっているというのである。よくできる子供は将来エリートともなる道も開けて自

分の育った環境とは別の世界や考え方で生きていくことができる。また英語のまったくできない子供は育った環境と教わることとのギャップに悩むということは少なくともない。ところがその中間層の子供は英語や西欧文化を中途半端に理解してしまい、現実とのギャップに悩み、自分のアイデンティティを失う危機に直面するというのである。

III章では独立後の現在も各国でしばしば繰り返される政争、抗争や飢餓の実状を指導者たちへのインタビューを含めた現地取材によって明らかにしていく。

本書には、著者が突然のアフリカ行きにとまどいながらも、ありのままのアフリカを断片から読みとろうとする姿勢が随所にてている。「さまざまアフリカ」のなかからしかアフリカは見えてこないというのが著者の論である。

(鈴木陽子)

伊谷純一郎ほか監修： アフリカを知る事典
Cyclopedia of Africa 東京 平凡社 1989年
527p.

アフリカへの関心の高まりを受けてこれは呪術から環境問題まで、アフリカのさまざまな側面への興味を満足させてくれる、おそらくわが国で最初の広範囲な事典であろう。日本のアフリカ研究者100名以上が、それぞれの専門分野で執筆協力している。

これまで事典という英文や翻訳調の文章に慣らされてきた目には、自然な文章が読みやすい。とくに、監修者に人類学関係の研究者が多く、アフリカの感覚、アフリカの物的見方に近づいた視点に立つことばの選択と記述には、「土」に根ざしたアフリカ社会を肌で感じ取らせようという努力が見られる。また、写真や口絵が美しく、文字の大きさや字体を幾様にも使いわけたり、ページの見だしに工夫をこらすなど、使いやすいうように配慮されている。

構成は、中心となる「項目編」ではアイウエオ順に歴史、自然、国、都市、文化、社会、思想、生活習慣、動植物、人物など広いテーマに関することばが選ばれ

ているのが特徴である。野生動物が多数取り上げられているのは、単に博物学的関心のみならず、人間社会との関係を重視してのことであろう。

続いて「地域編」では「生活と文化」の部で特殊アフリカ的生活の諸様相について総論、歴史概論、そして「日本とアフリカの関係」では政治と経済に分けて最新のデータを使って解説している。

最後の「資料編」は「各国便覧」「表」「文献案内」に分かれている。「各国便覧」は最新の情報を表形式で整理し、比較しやすく工夫されており、「年表」は西、東、中・南部アフリカ別に並行して見られるように編成されている。「文献案内」は分野別に代表的な図書を選び、短い解題を付している。タイトルに見られるように、単に調べるためではなく「知る」ために気軽にページを開いてどこからでも読みはじめられる感じの事典である。

平凡社のエリア事典シリーズの一冊。

(丹埜靖子)

土屋 哲： アフリカのこころ 奴隷・植民地・
アパルトヘイト 東京 岩波書店 1989年 viii +
195p. (岩波ジュニア新書) (Ja-32-Ts4)

現代の若い人々はアフリカについてどんな思いを持っているだろうか。サヘル地域を中心とする大旱魃の新聞報道や、日本のNGOによる援助活動など、この間のアフリカへの関心は高まってきている。

面積約3000万km²、この巨大な大陸に50を超える独立国がある。本書ではこの巨大なアフリカの近代史を軸としながら、アフリカの人々が21世紀にかけた期待を筆者のアフリカに寄せる共感を持った筆が描き出している。1500年代に始まる奴隷貿易、南北アメリカ、カリブにすむ彼らの子孫がアフリカに寄せる「父祖の地」への思い。ヨーロッパ列強による大陸の分割、このアフリカ人にとって矛盾だらけの「線引き」が現在のアフリカ諸国の国境に引き継がれ、それがもたらしたコンゴ動乱やビアフラ戦争に代表される困難な政治状況。アパルトヘイトに苦しむ南アフリカの人々。このよう

な状態が現在地球に存在することには、読者は嫌悪を覚えるだろう。

アフリカに限らずすべての援助に際して必要なことであるが、筆者は最後に、先進国という位置から後ろ向きにアフリカを援助するのではなく、アフリカの現在の位置からアフリカとともに前向きに未来に向かうことが大切であると述べている。日本が先進国と言われるようになったのはそんなに昔のことではない。しかしそれは遠い昔のことと考えている若い人々が多くなっている。

筆者のアフリカへの愛情と共感が全体に感じられ、アフリカをより知りたい全ての若い人々に読んで貰いたい。

(井村 進)

吉田ルイ子： 南ア・アパルトヘイト共和国
東京 大月書店 1989年 175p.

ニューヨークのハーレムの取材写真などで知られるフォト・ジャーナリストの吉田ルイ子さんが南アフリカ共和国で2週間取材をしたときの記録。アパルトヘイトに反対するリベラル派のある白人が絶望的にいった「Nothing we can do (どうしようもない) それがこの国の現実よ」という言葉。それが、日本でも公開された映画「ワールド・アパート」の1シーンに出てくる同じ言葉と重なって著者の印象に残る。これに対して、著者はSomething we can do (何かできることがあるのでは?) と読者といっしょに考えたいと思って自分の体験を本にした。

一種の体験記、旅行記なので読みやすくいきいきとしている。そして、著者がフォト・ジャーナリストなので当然大小さまざまな写真が数多くはいつており、それが文章では語れない多くを語ってくれる。さらに下段の約5分の1が脚注のスペースにあてられており、基本的用語(アパルトヘイト、カフィール等)、歴史的事項(ソウェト蜂起等)、人名から、「黒人の肌のつや」「サン・シティに来る台湾人観光客」といった解説、著者のとった数々のスナップ写真、南アの新聞に載っ

たトヨタの広告などにいたるまで、説明されている。この欄を見るだけでも、けっこう面白いし、教えられる。

巻末にはANC日本事務所代表のジェリー・マツィーラ氏とのインタビュー、林晃史氏によるアパルトヘイトについての解説、およびアパルトヘイト関連年表がついている。

このように本文、写真、脚注、巻末のインタビューに解説と、多面的に、かついきいきと南アとアパルトヘイトの現実が示されるので、アパルトヘイトの問題がどうも現実の問題として身近に迫ってこないと感じている人々——日本人の多くがまだそう思っているのではないだろうか——が最初に読むアパルトヘイトに関する本としてお勧めできる。

(児玉谷史朗)

池野旬： ウカンバニ——東部ケニアの小農経営
—— 東京 アジア経済研究所 1989年 287p.
(Ja-631, 1-A19)

アフリカの農業に対する日本人の関心は、この5～6年間にかなり高まったが、実際にアフリカ人の小農民がどのように農村で生活をし、どのようにして食料生産を行なっているか、しばしば襲ってくる旱魃などの自然災害に、自らどのような手段で対抗しているか、などの事実は、まだあまり知られていない。

本書は、筆者が1982年から84年にかけての2年3ヵ月、東部ケニア農村部で農家実態調査を行なって得た資料に基づき、上記のような問いに答えようとした労作である。題の「ウカンバニ」とは、ケニアの部族グループのうち4番目に大きいカンバ人の住む地域という意味で、地図上では東部州マチャコス県とキトウイ県を指し、ケニアの代表的な半乾燥地域である。筆者の調査方法は、6ヵ所から275世帯の調査対象農家を選び、聞きとり調査により世帯の構成や世帯主の履歴、土地保有と土地利用状況、家族労働力、雇用労働、労働交換のあり方、農耕と牧畜の作業形態、労働移動と教育程度との関連、農家副業や商業活動などを克明に

記録するという手法である。このようにどちらかというところとミクロの農村社会（といっても最も遠い調査地間の距離は50km以上もある）を詳しく描写することによって、ケニアの農村で何が起きているかという大きな問題にも光をあてることに本書は成功している。

ケニアは土地登記を政府主導で行ない、土地の私有化を積極的に推進した国として知られるが、土地保有の実態が登記簿とかなり違っており、親族間の相続などが起こっても名義人の変更がなされてないことも多いことが分かる。旱魃に対する農民の自衛策が、農耕、牧畜、非農業就業をすべて含む経営多角化への指向であるとか、現在「より乾燥した半乾燥地」への小農世帯の移住が進行しているとか、ケニア農業の現状についての認識を新たにさせてくれる書である。

(吉田昌夫)

— アジア経済研究所アフリカ関係新刊書 —

80年代アフリカ諸国の経済危機と開発政策

吉田昌夫編 1987年 B 5判 240ページ

アフリカ援助と地域自立

林 晃史編 1988年 A 5判 281ページ

ウカンバニ —— 東部ケニアの小農経営

池野 旬著 1989年 A 5判 287ページ

アフリカ農村社会の再編成

林 晃史編 1989年 A 5判 251ページ

—— お問い合わせは広報課へ ——